OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	西洋音楽思想の近代 : 西洋近代音楽思想の研究
Author(s)	三浦, 信一郎
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43181
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【15】

氏名	三浦信一郎（みうらしんいちろう）
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第16679号
学位授与年月日	平成14年3月12日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	西洋音楽思想の近代 －西洋近代音楽思想の研究－
論文審査委員	（主査） 教授 神林 恒道 （副査） 教授 上倉 庸敬　教授 根岸 一美　助教授 藤田 治彦

論文内容の要旨

本論文は、十八・十九世紀から二十世紀の現代にいたる音楽の展開を、「芸術音楽における近代」の視点から、その音楽思想史的な意味を問い直そうとした試みである。論文の構成は、まず全体の構想を概観する「序　情緒－描出から感情－表現へ－」から始まり、「第一部　西洋音楽思想における近代」、「第二部　近代音楽学の成立」、「第三部　音楽における近代と現代」の三部からなっている。第一部は「第一章　音楽における自然」、「第二章　ドイツ観念論と音楽」、「第三章　シェリングの音楽哲学」、「第四章　ヘーゲルの音楽哲学とベートーヴェン」、「第五章　絶対音楽の美学－ドイツ・ロマン主義の音楽論の展開とその問題－」、「第六章　ドラマ的交響曲像への転換－R．ワーグナーの『ベートーヴェン』読解－」、「第七章　表題音楽について－ワーグナーの公開書簡『F．リストの交響詩について』の一考察－」、「第八章　ベートーヴェン神話の形成と支配－音楽の近代－」の八章からなる。論者はまず「人間の自然な音の感受性」という問題に着目し、そこから「芸術音楽における近代」への転換期の思想を浮かび上がらせようとする。その上で、「ウイーン古典派」の時代と相伴いつつ、大きな盛り上がりを見せたドイツ観念論の音楽哲学とロマン派の音楽論の思想がいかなるものであったかを考察する。そこに見出せるのは、自立的器楽、とくに交響曲ジャンルへの賛美と称揚である。この自立的な音楽は、同時に絶対者をも予感させる高い価値をもった音楽として「絶対音楽」と呼ばれることとなる。しかしこの概念の標榜したワーグナー以来、現実には音楽の中に文学的な音楽外的要素が次第に取り込まれていく。そこに「絶対音楽」と、これに対する「標題音楽」をめぐっての議論が沸騰してくる。この論議の中心人物が、リスト、ワーグナー、そしてハンスリックであるが、それにもかかわらず、両者がその価値を共有していたのがベートーヴェンの音楽であった。このベートーヴェン神話の検討を通じて「芸術音楽における近代」の意味が解明されてくるのである。

第二部は、「第一章　近代音楽学の成立をめぐるドイツ音楽思想の展開」、「第二章　アードラーの『音楽学』の体系法について」、「第三章　音楽学と芸術学－音楽学への芸術学の応用－」の三章に分けられている。音楽学は、十九世紀後半というそれまでの観念論から実証主義へ転換していく過程において成立している。それはまさしく「音楽思想における近代」を縮図のように凝縮したものだと言うことができる。またこの自立的な学としての「音楽学」の成立は、近代芸術学の成立とその時期を同じくしている。第二部では、観念的な音楽哲学から、実証的な新たな総合学としての音楽学がいかにして成立していったかを、思想史的に跡づけようとしている。

最終の第三部の構成は、「第一章　二十世紀モダニズムの音楽論－F．ブゾーニの音楽美学－」、「第二章　モダニ

ズムの中のアンチ・モダニズム－ヒンデミットの『実用音楽』をめぐる一九二〇年代の音楽観－」、「第三章　音楽における近代と現代」からなっている。二十世紀の初頭は、モダニズムの芸術音楽が最も先鋭的にその「新しさ」と「革新性」を主張した時代である。そうしたシェーンベルク一派の前衛音楽に、「実用音楽」をもって対したのがヒンデミットであった。そのような状況の中で、論者が「現代音楽」と見なす前衛的芸術音楽が、近代音楽の伝統とどのようにつながるところがあるのかが、多角的に論じられている。

論文審査の結果の要旨

本格的な「音楽美学」の力作である。かつて「西洋音楽思想」の歴史を語るに際して、音楽についての哲学的美学の記述は不可欠であった。ところが、ハンスリックの『音楽美論』の評価の高まりとともに、その思想史的研究も音楽の「哲学」から、音楽の「科学」へと比重が移り、その結果、近年はこの種の研究は絶無に近い状況にある。といっても、かつてのわが国での「音楽美学」は、そのおおかたが二次文献による、その紹介に留まっていたのである。本論文が何よりも評価されるべきは、「西洋音楽における近代」というテーマを設定して、カントからドイツ・ロマン主義、そしてシェリング、ヘーゲルに至る美学思想の流れのに対応させて、ウィーン古典派からベートーヴェンへと高まっていったドイツ音楽の思想的展開を読みとったことである。中でも、いわゆる「絶対音楽」の理想を「絶対者」の哲学の体系と、さらにまたロマン派の「新しい神話」の理念を「ベートーヴェン神話」の形成の問題と重ね合わせて論じた発想は卓抜しており、説得力がある。

次に評価されるべきは、音楽の「哲学」がいかにして「科学」に移っていったかを、相互排他的ではなくて、この二者を統合する形で論じている点である。その一つのポイントとなっているのが、実証的な「音楽学」の成立が、もともとフィードラーの「芸術学（美術学）」をモデルとしていると見る、すなわち「音楽学への芸術学の応用」という視点である。論者はさらにその視野を広げて、「音楽における近代と現代」の問題にまで言及している。この研究を評するに、「温故知新」という言葉が見事に当てはまる。この論文は、従来の「音楽美学」と「音楽学」を総合する新たな「音楽美学」の可能性を示唆するものであり、今後の美学・芸術学、とりわけ音楽学研究に大きな刺激となるであろう。

ただしこの論文は、一貫したテーマに沿って構想されたことは分かるが、多年の研究をまとめたものであり、若干の重複した論述が認められるが、この大きな成果を見るならば、まったく問題にはならない。よって本審査委員会は一致して、ここに本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものであると認定する。